

フォスター、ハル編著『反美学』室井尚、吉岡洋訳、勁草書房、2005.

クリンプ、ダグラス「4章 美術館の廃墟に」81-103

・美術館における死、腐敗のメタファー

・「作品の生死は、美術館やそれを通じて作用する特定の歴史によるものではなく、芸術作品それ自体に依存すると彼は考えるのである。つまり、間違った展示方式が作品を歪曲してしまうことはあっても、芸術作品それ自体はあくまでも自律的な本質を有しているというのである。」（82）

・「しかしながらクレーマーの分析は、芸術を首尾一貫した姿で展示しようとする美術館の要求が、現代の——ポストモダニズムの——芸術実践によって既に疑問に付されているということを、捉えそこなっているのである。」（83）

・フロベール『ブヴァールとペキシュ』における収集と分類に、百科事典的と言うフーコー的解釈から進んで、異種混交の事物をコレクションする美術館の論理を見る。

・ドナト引用個所「美術館が提示する諸事物のまとめりは、それらが何らかの仕方で一貫した表象の宇宙を作りあげるという虚構によってのみ支えられている」（92）

・写真は、空想の美術館に美術を収集させるだけでなく、それらを系統立てていくためのメディアでもある。マルロー引用部分「それらはものとしての特性を喪失する。しかしそれとともに、それらは何かを獲得するのである。すなわち、それらが獲得しうる最大限の、様式上の重要性を獲得するのだ。．．．こうして、写真複製が多様な対象の上に押し付けるもつともらしい統一のおかげで、彫像から浅浮彫、浅浮彫から印象、印象から遊牧民のブローチにまで至る「バビロニア様式」なるものが現れ、しかもそれが単なる分類として、つまり何かが似ていることとしてではなく、むしろ実在するものとして、すなわちそれらを造った人間の生の物語としてみなされるのである。」（95）

・しかし、写真自体が美術館に作品として認められることで、美術館のなかに異質性が生じることとなるというクリンプの指摘。その例証として、ラウシェンバーグのミックス・メディアの作品を考察。（96-98）